

1 グループ 山間部

① 参加のハードルが高い問題（人が出てこない）

現状・課題

- ・ボランティアは敷居が高く、担い手が限られる
- ・情報は分かっているが、行動に移す高齢者が少ない
- ・サロンはあるが、行けない人が取り残されている
- ・高齢者を「引っ張り出す」仕組みが不足

方向性・視点

- ・「ボランティア未満」のゆるい関わり方を用意
- ・参加＝役割ではなく「ついで・おまけ・一緒に」で参加できる形
- ・送迎・付き添い・声かけを含めた行動を後押しする支援

② 情報が届かない・つながらない問題

現状・課題

- ・常会がなくなり、情報伝達のルートが弱体化
- ・サロンに来られない人へ情報が届かない
- ・情報はあるが、受け取る側に届いていない

方向性・視点

- ・口コミ・対面・顔の見える関係を活かしたアナログな情報伝達
- ・「情報を渡す人」を決める仕組み（キーパーソン・見守り役）
- ・カフェの乗り合わせなど、移動と情報をセットにする工夫

③ 支援の担い手不足・育成の課題

現状・課題

- ・買物支援・ボランティアの確保が難しい
- ・通所付き添い講習が年数回で、育成に時間がかかる

方向性・視点

- ・専門性が必要な支援と、不要な支援を分ける
- ・養成前でもできる「簡単な関わり」を増やす
- ・既存の活動に小さな役割を足して担い手を増やす

④ 地域資源・コミュニティの再構築




現状・課題

- ・地域のつながりが弱まっている
- ・既存資源が活かしきれていない

方向性・視点

- ・集まること自体を目的にしない「用事のある集まり」
- ・カフェ・サロン・移動支援を拠点化
- ・移住者を「支援される側」ではなく担い手として巻き込む
- ・移住者支援の情報を地域側にも周知

(1グループ) 目的の階層化 主語は住民

| | | |
|---|------------------------------------|---|
|  | <p>レベル5 (未来の姿)</p> | <p>高齢者がスマートフォンなどのデジタルデバイスの必要な機能を抵抗なく利用でき、キャッシュレス支払にもスムーズに対応できる。</p> |
| | <p>レベル4 (将来的な目的)</p> | <p>パークは売り場面積が小さく高齢者には買物がしやすいとの声も聞かれるが、商品数が多くはなく、客数も減っているのでは閉店する？という話しも聞かれることがある。地域に根差した小規模のお店への継続支援は必要ではないか。</p> <p>移動手段などは各地区で独自の取り組みも聞かれる。情報の整理と取り組みについての共有をすることも必要ではないか。</p> <p>また、地域ごとに実情は異なり、根差しているお店もある。地域の実情に応じた販売形態の実現、例えば無人販売所や移動販売、食料品の自動販売機で支払方も現金やキャッシュレスなどが出てきてもいいのではないか。</p> <p>配食サービスは拠点までの運搬をだるま屋に頼んでおり、配送費をお支払いしているので、利用が増えることで事業継続に繋がり、結果としてだるま屋への支援になるのではないか</p> |
|  | <p>レベル3 (主たる目的)</p> | <p>自宅から買物先や市民センターなどの拠点までの移動手段を確保できる。</p> <p>乗合タクシーの便数の増加 (R9、R10年頃から？生活福祉バスから変更予定) 生活福祉バスは利用者減少のため乗合いタクシーに変えていく方向で検討中。</p> <p>福祉移送サービス事業の利用目的を見直してみる。限定的に買物の使用ができるようになっているのは先進的ではあるものの、変化するニーズに合わせて見直す必要は出てくる。しかし、内容によっては公共交通に影響する可能性もあることを考慮する。</p> |
|  | <p>レベル2 (すぐに行える事)</p> | <p>デイサービス、ミニデイなどのご高齢者向けにスマートフォン教室を開催してスマートフォンの使用に慣れてもらう。(スマートフォンでキャッシュレス支払がスムーズにできれば無人店舗などお店の形態の選択肢が増え、利用機会も増える。)</p> |
| | <p>レベル1 (既に行われている事)</p> | <p>だるまの配達、生協(個配)、近所の人のお迎えでの買物(年々減少傾向)、家族帰省時の送迎やお使い、受診時に医療機関の近くでの買物、移動手段として生活福祉バスの利用、自家用車の使用、帰省した家族の車、家族の帰省時に所有している車を運転してもらう、など。</p> |

2 グループ 市街地

①移動手段が限られていることによる生活不便

現状・課題

- ・バスの乗り降りが身体的に負担で利用しづらい
- ・移動手段がなく、外出や買い物をあきらめている高齢者がいる
- ・免許返納＝移動手段喪失という不安が強い

方向性・視点

- ・電動ステップ等、公共交通を使いやすくする環境整備
- ・移動に特化したセニアカーの開発・活用
- ・免許返納以前から代替手段を「知る・体験する」機会づくり

②セニアカー・代替移動手段が生かしきれていない問題

現状・課題

- ・中山間地域ではセニアカー貸与の条件が緩和されているが、制度が十分に理解されていない。
- ・ケアマネジャーの知識不足により、利用に繋がっていない

方向性・視点

- ・ケアマネジャー等支援者への制度理解・情報共有の強化
- ・移動支援を「特別な支援」ではなく、日常的な選択肢として位置付ける

③買い物支援を「人の手」と「仕組み」で補う課題

現状・課題

- ・戸別配達や注文のハードルが高い
- ・買い物を一人で行うことが難しい人が増えている

方向性・視点

ボランティアが

- ・個配の手伝い、注文支援を担うなど人による軽い支援を組み合わせる
- ・「全部やる支援」ではなく「一部を支える支援」へ

④集まり×買い物で閉じこもりを防ぐ仕組み

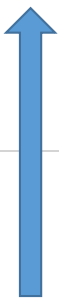

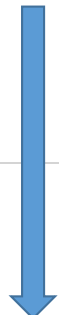
現状・課題

- ・外出や買い物が単独では億劫になり閉じこもりがち
- ・サロンやイベントはあるが生活支援と結びついていない

方向性・視点

- ・みんなが集まる場所に配達がくる仕組みを作る→買い物+交流+楽しみを同時に確保
- ・イベントや集まりの「ついでに」買い物ができる仕組みづくり
- ・生活行動と交流を切り離さない設計

(2グループ) 目的の階層化 主語は住民

| | | |
|--|----------------------------|--|
|  | レベル5 (未来の姿) | |
| | レベル4 (将来的な目的) | ・ 無人販売所（自動販売機）で地域の人が農産物等を販売することができる環境を作り、出品することによる生きがいができる。 |
|  | レベル3 (主たる目的) | ・ 移動販売のルートや配達に限界があるため、無人販売（自動販売機）を生活の拠点に設置する。 |
|  | レベル2 (すぐに行える事) | ・ 利用できることを知らない人もいるため周知活動の強化をする。 ・ 代が変わったとしても利用できる制度について世代間で共有を行う。 |
| | レベル1 (既に行われている事) | ・ ホット広場たかはし（毎週木曜日）にマルナカの移動販売車が来ている。自力で来ることが難しい人は送迎利用ができる。 ・ 町内会活動として買い物ツアーを実施している箇所もある。 |